

●精神病院の祭りが町の祭りになった

群馬県太田市。麦畑の中の道を抜けて丘を登っていくと、ややくたびれたりリゾートホテルのような建物の玄関に出ます。地元の愛称は「ホワイトハウス」。鉄格子も鍵もない精神病院「三枚橋病院」です。

つつじの季節になると、スタッフはチンドン屋に扮して町を練り歩きます。ここで、文化祭が開かれるのです。近隣から2～3000人も人が集まります。近所の子どもたちが、焼きそばの売り子になり、プールの釣り堀を楽しみ、舞台上で花笠音頭を踊り、病棟の中につくられたお化け屋敷に列をつくります。

子どもたち中心の企画を盛りだくさん組んでいるのには、わけがあります。精神病院や患者さんの姿を子どもたちに肌で知ってもらうためなのです。



イタリア・トリエステの医師たちが話してくれた改革の哲学は、三枚橋病院では、その大半が既に実践されていました。たとえば、石川信義院長は『開かれている病棟』（星和書店）に、1968年、38歳のとき開設した当時のことを、こう書いています。

「私たちは、患者さんの病的な部分をほじくりかえすことをやめ、健康な部分だけを見つめて彼らとかかわることにしよう……勉強会の席でいつもこんなことが話し合われた」

専門誌で精神科医に呼びかけています。

「精神病院の関係者たちは、世間に向かって『精神病患者への差別や偏見をやめてください』と叫ぶ。しかし、鉄格子の中から首だけ出して、百万遍『やめてください』と叫んだところで、それで、世間の意識が変わるものでもあるまい。なぜなら、世間の人はいく危険だから鉄格子の中に入れられている>と考えているのだから。それ故、私たち自身が先ず鉄格子を外すことから始めなければならぬ」と。

ヒマラヤや南極探検隊にも参加した山男、石川さんが、東京の有名な精神病

院での治療に見切りをつけて、若い看護師、看護婦と、ここに小さな病院をつくったのは、トリエステの改革の3年前の初夏でした。

当時の精神科医はみな、「入院患者は、まず、鍵のかかった閉鎖病棟に入院させ、『逃げ出さない』と見極めがついてから、鍵のない開放病棟に移すもの」と教えられていました。石川さんたちは、大胆にも、この常識に逆らう病院をつくろうと企てたのです。

閉鎖病棟は「患者に不安と絶望を与え」「考える余裕を奪い」「妄想や幻覚のような病的世界を肥大させ」「治療者と患者の出会いを台なしにする」。それまでの体験から、そう、考えるようになったからでした。

鍵で無理やり閉じ込めることをやめました。

日本中の精神病院で行なわれてきた数多くのしきたりを、病院開設と同時に廃止しました。面会、通信、電話はいつでも自由、所持品検査なし、男女交際も自由。

禁止事項は「院内での飲む・打つ・買う」だけです。

地下室の本格的なディスコでは週1回ダンスパーティーが開かれ、病棟には山小屋風や和風の憩いの空間が設けられました。しゃれた喫茶店では、いつでもお茶を楽しめます。参加不参加は患者さんの自由です。

私が初めてこの病院を訪ねた1978年、石川さんはこんなふうに話しました。

「患者さんの異常な行動を、私たち精神科医は『病気のせいだ』とっていました。しかし、それは考え違いだったようです。病気に加え、閉鎖空間という環境が、その傾向を助長していたことは疑いありません」

トリエステで行なわれている共同住居の試みも、三枚橋病院は独自に実践してきました。今、太田市内に17軒。最近、大家さんや隣家の人になにくれとなく面倒をみてくれるようになりました。訪問看護を受けている患者さんは約100人。その数は、ますます増えていっています。

*

イタリア、スウェーデン、日本と、遠く離れているのに、またハンディの身も違っているのに、どの人たちも、試行錯誤の末に同じ道を探りあてているように、私には思えます。

長く続いたしきたりや規則を疑い、思いきって無くしていくこと。ハンディを負った人の判断と誇りを尊重すること。

それが利用者を蘇らせています。

ハンディを負った人々が、町の人から支援されるようになりつつあります。

それぞれの施設は町の文化の拠点となり始めています。

ただ、大きな違いがあります。

イタリアでは1978年にできた法律180号法が応援しています。スウェーデンでは法律と税金が支援します。ですから、ごくふつうの施設、ごくふつうの病院、平凡な職員が、利用する人の身になって新しいことに挑戦できます。それも、さりげなく。

けれど、私たちの国では、利用者の身になってなにか新しいことをしようとすると、法律や制度やしきたりが、壁となって立ちふさがります。三枚橋病院の台所はいつも倒産寸前の火の車です（詳しくは岩波新書・石川信義著『心病める人たち』を）。湘南学園は事件に巻きこまれて敷地を半分売り、中沢さんは学園を去りました。ハードルを乗り越えるには、涙ぐましい努力で資金を集め、ずば抜けたアイデアや説得力で法律の解釈を変え、無償の労働で資金不足を補うことが必要とされるのです。

それは、ちょうど、鉛の足かせをつけて走り高跳びにのぞまねばならない陸上選手みたいです。

日本では、「すごい男」「すごい女」にしか飛び越えられないのです。

『「寝たきり老人」のいる国いない国～真の豊かさへの挑戦』（ぶどう社 1990）

第3章 真の豊かさを実現するために 日本のすごい女たち・男たちより